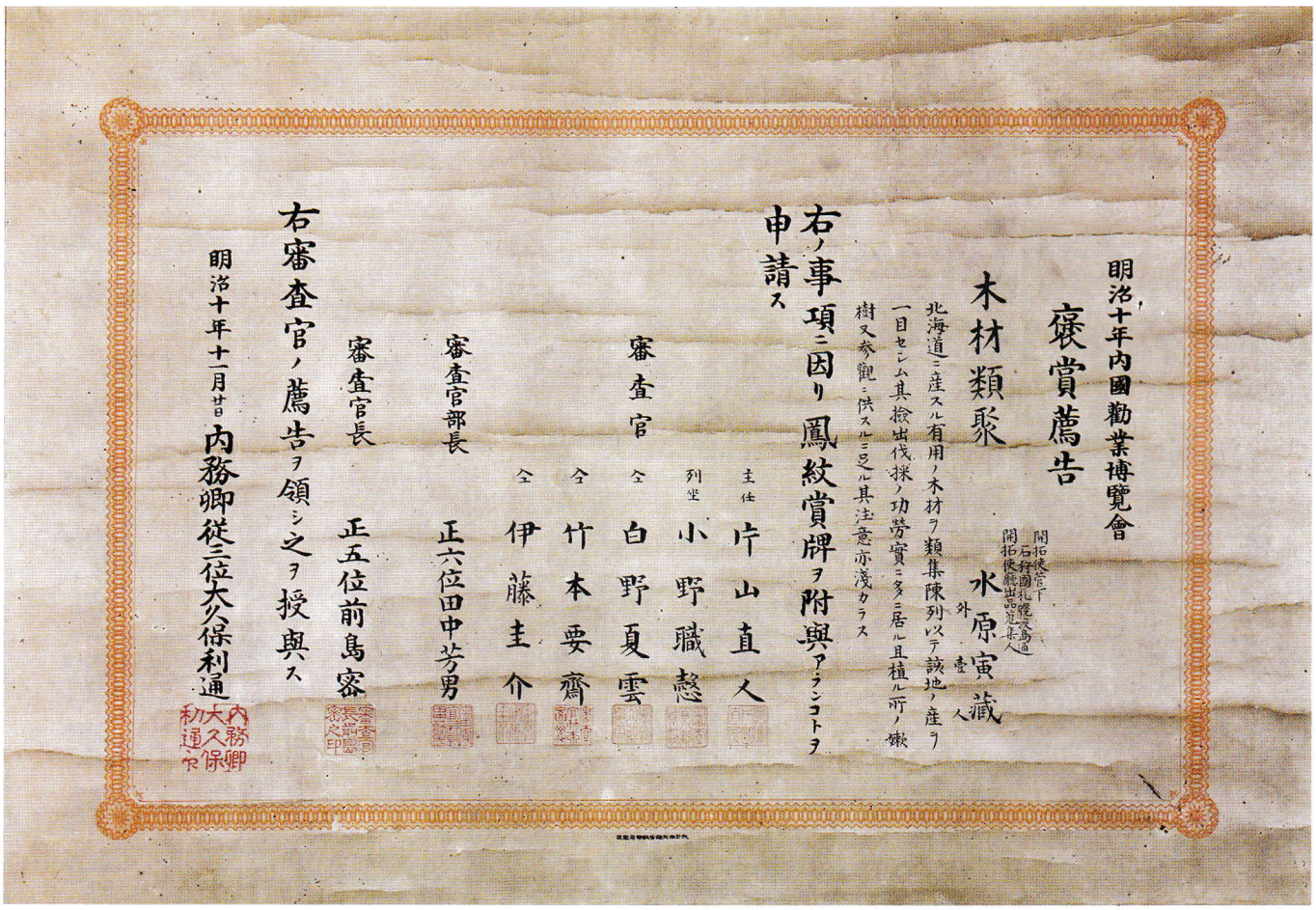
■シリーズ沼津兵学校とその人材　100
博覧会・博物館と沼津兵学校の人脈
■企画展「愛鷹山」について
■古文書解読入門講座実施報告
■史料館からのお知らせ

沼津市明治史料館通信
二〇二〇年一月
通巻140号


明治十年内國勸業博覽會
褒賞薦告
木材類聚
開拓使官員
石狩國札幌郡
開拓使熊出西道長人
水原寅藏外壹人
北海道ニ産スル有用ノ木材ヲ類集陳列以テ該地ノ産ヲ一目セシム其撿出伐採ノ功勞實ニ多ニ居ル且植ル所ノ樹又參觀ニ供スルニ足ル其注意亦淺カラス
右ノ事項ニ因リ鳳紋賞牌ヲ附與アランコトヲ申請ス
主任　片山直人
列坐　小野職愨
審査官　白野夏雲
審査官　竹本要齋
審査官　伊藤圭介
審査官部長　正六位田中芳男
審査官長　正五位前島密
右審査官ノ薦告ヲ領シ之ヲ授與ス
明治十年十一月廿日
内務卿從三位大久保利通

明治十年内国勧業博覧会褒賞薦告
明治10年（1877）11月20日
（当館蔵）

北海道で産出される有用木材の標本「木材類聚」を出品した札幌の水原寅蔵他１名に対し、授与されたもの。内務卿大久保利通を除き、審査官長前島密、審査官部長田中芳男、審査官伊藤圭介・竹本要斎・白野夏雲・小野職愨・片山直人は、いずれもかつて幕府に職を奉じた人たちだった。主任をつとめた片山直人は沼津兵学校第３期資業生出身の内務省山林局官吏で、『山林新説』（1877年）、『日本竹譜』（1886年）などの訳書を持ち、樹木に関する専門的な知識を有した。

（樋口雄彦）

シリーズ　沼津兵学校とその人材　100

博覧会・博物館と沼津兵学校の人脈

現代の私たちのイメージでは、博物館が自然や文化に関わる資料を収集・保存・展示する常設施設であるとすれば、博覧会は商品や技術の宣伝・販売などを目的とした期間限定の催し物という違いが明確である。しかし、その起源は両者ひとつだった。日本では博物館・博覧会とも明治以後に西洋から取り入れられたものであるが、それに似通ったものはすでに江戸時代に存在した。近世後期から、本草学に関心を持つ大名・医師・蘭学者・文人たちのコレクションの存在と、彼らが珍しい植物・動物・鉱物などを持ち寄って開催した物産会・薬品会などがあったのであり、それが日本における博物館・博覧会のルーツだった。明治以降もそのような好事家による伝統的な集まりは存続し、たとえば多識会という会には静岡藩沼津病院の医師だった林洞海も栗本鋤雲・田中芳男らとともに参加している。また、近世の本草学の系譜上においても博物館・博覧会は、学術・教育を目的とするものと、産業振興を目的とするものとの渾然一体となっていたが、維新後になるとその二つの流れは分離していった。

日本人が欧米の博物館を実際に見たのは、万延元年（一八六〇）の遣米使節がスミソニアン博物館を見学したのが初めである。博覧会については文久の遣欧使節によるロンドンでの体験が最初であった。そして、幕府は慶応三年（一八六七）に開催されたパリ万国博覧会に初めて出品した。陶器・漆器などの製品以外に、物産学（博物学）の先駆者であり、開成所物産局のスタッフだった伊藤圭介・田中芳男らが集めた昆虫・植物標本なども出品され、日本の存在を世界にアピールした。伊藤・田中らは維新後も明治政府内で同様の仕事を続け、伊藤は最初の理学博士となり、田中は日本における博物館・動物園・植物園・水族館の生みの親と呼ばれる存在となった。

将軍名代徳川昭武の随行員としてパリ万博に派遣された幕臣の中には、帰国後に沼津兵学校教授となった田辺太一・山内勝明、静岡学問所教授になった向山黄村らがいた。同じく山高信離は、静岡藩時代を経て、明治政府出仕後にウィーン（一八七三年）やフィラデルフィア（一八七五年）の万国博覧会の担当、第一回内国勧業博覧会（一八七七年）の事務局御用掛などをつとめ、明治二一年（一八八八）に帝国博物館長に就任、二七年（一八九四）には京都・奈良帝国博物館長を兼務するなど、長く博覧会・博物館行政に携わった。

沼津兵学校第四期資業生になった佐久間信英（旧名は忠次・忠次郎・椿平、一八四〇～一九〇三）は、幕末には砲兵差図役頭取勤方（文久三年二月）、養父真輔跡式（慶応二年）、改役兼勤（同三年一二月）といった経歴をたどった人物であるが、大蔵省紙幣寮・印刷局などを経て、明治三〇年（一八九七）から三六年まで書記として帝国京都博物館（現京都国立博物館）に勤務した。旗本一色仁左衛門の子に生まれた信英は向山黄村の実弟だったことから、館長である

武士姿の佐久間信英
（山内正明氏蔵・谷本晃久氏提供）

山高信離に知られ、採用されたのかもしれない。山高の娘は佐久間の甥向山慎吉の妻になってもいた。なお、博物館での同僚には技手海津武次郎（竹堂、元陸軍騎兵少尉）がいたが、彼は沼津兵学校資業生としての後輩海津三雄の養父だった。

幕末のパリ万博にまでさかのぼる博物館・博覧会における山高の人脈には、他に沼津兵学校第三期資業生だった三田佶（一八五一～一九二三）がいる。彼は明治八年（一八七五）に米国費府博覧会事務官随行を命じられ、翌年渡航、アメリカ・フィラデルフィア博覧会での事務を担当し、一〇年に帰国した。帰国後も内国勧業博覧会事務局雇や仏国博覧会事務取扱をつとめ、一一年（一八七八）にはフランスに渡っている。佶の父三田葆光は、幕末のパリ万博に派遣された一人であり、当然ながら山高とは旧知の間柄であった。

さらに、沼津兵学校第四期資業生から内務省勧業寮十四等出仕になっていた笹瀬元明（？～一九〇一）も、フィラデルフィア万国博覧会に事務官として携わり、渡米した。同万博において日本の教育の歴史と現状を伝えるため出品された英文冊子『JAPANESE EDUCATION（日本教育）』は、沼津兵学校二等教授だった乙骨太郎乙が中心となり英訳したものだった。また、工部省への出仕を経て、博覧会事務官に就任しウィーン万国博覧会に派遣された人物として、沼津兵学校の管理部門である軍事掛俗務方だった竹内正義（市十郎）がいる。

晩年の佐久間信英
（山内正明氏蔵・谷本晃久氏提供）

内務卿大久保利通が主導して開催された第一回内国勧業博覧会は、殖産興業を目的とした一大イベントであった。沼津兵学校出身者からは、特定分野の専門家として出品物を評価する審査官になった者を見出すことができる。洋画の先駆者として知られ沼津兵学校絵図方だった川上冬崖（一八二七～八一）は、陸軍省に奉職するかたわら、第一回および第二回内国勧業博覧会（一八八一年）で美術部の審査主任をつとめた。静岡藩軍事掛・権少参事として沼津兵学校の管理部門の幹部だった矢田堀鴻（一八二九～八七）や沼津兵学校第三期資業生だった片山直人（一八四〇～九六）も審査官をつとめている。

事務方ではなく、博物館の中身すなわち資料について貢献した人物として沼津兵学校三等教授並だった榊綽がいる。彼は太政官地誌課を辞してから後、私的に博物標本の製作を志し、東京帝国博物館に収蔵された動物骨格のほとんどを担当したという。

博覧会や博物館の建物に関わった人物もいる。沼津兵学校資業生から工部大学校に進学した新家孝正（一八五七～一九二二）は、シカゴ万国博覧会の鳳凰堂・京都帝室博物館・第五回内国勧業博覧会東京別館・東京帝室博物館表慶館・ロンドン日英博覧会パビリオン・上野動物園表門・奈良帝室博物館鉄扉の建設や工事監督などに建築家として携わった。

〔参考文献〕
『海外博覧会本邦参同史料（第二輯）』、『明治前期産業発達史資料　勧業博覧会資料』、「沼津兵学校職員伝（二）」、『京都国立博物館百年史』、『概要「日本の教育の歴史と現状」――一八七六年フィラデルフィア万博のために――』、『百官履歴』二、『榊令輔後綽及室幸子略伝』、「沼津兵学校関係人物履歴集成」、国立公文書館蔵・江戸城多聞櫓文書

（樋口雄彦）

令和元年度第二回企画展「愛鷹山」開催中

令和２年２月２日(日)まで、企画展「愛鷹山」を開催しています。明治史料館では珍しい、自然や動・植物、考古学の範囲までを含む展示です。沼津市民には身近な、でも良く知らない愛鷹山について、この機会にぜひ一度ご観覧ください。

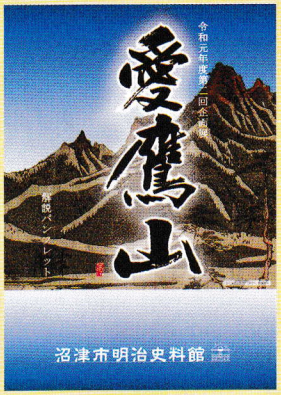
11月15日(金)のギャラリートークにゲストスピーカー登場！

ゲストスピーカー
足立公生氏（日本大学講師）

「ヒノキとスギの違いが分かりますか？」で始まったギャラリートーク。愛鷹山の植物群生の研究などで、日頃フィールドワークで愛鷹山中をご自分の庭のように駆け回っていらっしゃる先生の、興味深い貴重なお話が聞けました。

愛鷹山固有種 ▶
アシタカカンアオイ
（１階受付に展示中）

解説パンフレット
好評頒布中!!



A4判 11ページ
オールカラー
1冊　100円

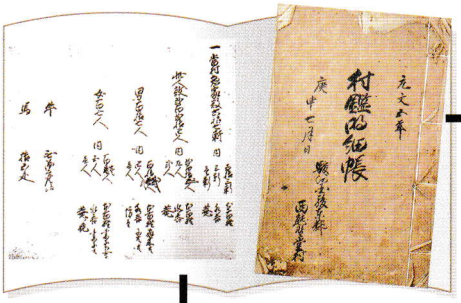
古文書解読入門講座実施報告

古文書解読入門講座は、当館の開館２年目から開催されている、古文書に初めて触れる初心者向けの講座です。例年９月頃に５回で開催していましたが、「もう少し勉強したい」との声にお答えして、今年は10回コースに倍増し、26人の方が参加されました。近世の地方（じかた）文書をテキストにしていますので、江戸時代の沼津の様子や人々の暮らしがわかります。他にも干支や暦、方位や単位などについても学べる充実した講座になったようです。来年度も実施予定です。興味のある方のご参加をお待ちしております。

たとえば

ほんの一部ですが

古文書から こんなことが わかります！



元文五年
村鑑明細帳
駿河国駿東郡
西熊堂村
庚申七月日

十二支は知ってるけど
十干って何？

元文５年は西暦1740年
十干十二支（じゅっかんじゅうにし）
でいうと、庚（かのえ）
申（さる）
の年だというのがわかります。
ちなみに令和２年は庚子（かのえね）です。

＊十干十二支で有名なのが
「丙午（ひのえうま）」
この年は災いが多く、丙午生まれの女性は夫を殺すという迷信があります。
また、球児の聖地「甲子園球場」の甲子（きのえね）は竣工の年大正13年が甲子の年で、十干十二支の最初の組み合わせで縁起がいいとして命名されました。

この頃の西熊堂は、
当然のことながら沼津市ではなくて、
駿河の国の駿東郡西熊堂村です。

一当村惣家数六拾七軒　内　五拾三軒　本百姓
　　三軒　水呑
　　壱軒　庵
此人数弐百弐拾四人　内　弐百拾三人　本百姓
　　九人　水呑
　　弐人　庵
男百拾七人　内　百拾弐人　本百姓家来共
　　四人　水呑子共共
　　壱人　坊主
女百七人　内　百壱人　本百姓妻子下女共
　　五人　水呑妻子共
　　壱人　庵ノ姥
牛　無御座候
馬　拾五疋

壱（一）、弐（二）、拾（十）
なんて、祝儀袋などを書くとき
くらいしか使いませんよね！

西熊堂村の家数は全部で67軒
内訳
- 53軒　本百姓（自分の土地を持っている）
- 3軒　水呑百姓（自分の土地を持っていない）
- 1軒　庵（お坊様とその世話をする女性がいたようです）

男女別で見ると　男性117人
　　女性107人
合計224人の住人がいたことがわかります。
また、牛はいないけれど、馬は15頭いたことも書かれています。

村鑑（むらかがみ）明細帳

村から領主に提出した、村のことを詳しく書いた書類のこと。

- 村高（むらだか）―米などの収穫量
- 反別（たんべつ）―田畑の広さや質
- 家数（いえかず）―家の軒数
- 人別（にんべつ）―人の数や身分などを書き付けたもので、時代や村により牛や馬の数、橋や鉄砲の数、医者や寺社の数など、細かく書いたものもあります。

当時の村の様子をうかがうことのできる
とても貴重な資料です。

沼津市明治史料館通信
第140号
令和２年１月25日
編集・発行　沼津市明治史料館
〒410-0051 沼津市西熊堂372-1
TEL 055－923－3335
FAX 055－925－3018
印刷　みどり美術印刷株式会社

史料館からのお知らせ

臨時休館　展示替作業のため下記のとおり休館させていただきます。
・令和２年２月４日(火)～２月６日(木)

無料開放　令和２年２月23日(日)は「富士山の日」のため無料でご観覧いただけます。富士山の描かれている浮世絵などのミニ展示コーナーもご覧いただけます。